慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 國民黨と支那革命 共産黨との關係(安倍源基著, 人格社發行) |
| Sub Title | |
| Author | 山本, 光郎(Yamamoto, Mitsuo) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1930 |
| Jtitle | 史学 Vol.9, No.3 (1930. 9) ,p.158(514)- 159(515) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300900-0158 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

同一致の精神が必要であること。(四)日本に目錄學を發達させる必要があること。(五)日本に於てももう少し博物館や研究所を造り、各地に研究者、探險家を派遣して色々の器物を發掘し、さうしてさういふ物から實際の支那文明を研究するといふ機運を作る必要があること等であるが、全く同感に堪へない。

次に佛蘭西に於ける錚々たる支那學者アンリ・マスペロ氏は「先秦時代の支那に於ける西方文化の影響」について叙述されてゐる。この雄篇はかつてマスペロ氏の滯京當時本塾に於て講演されたもので、少しく無理なところもあるが、其の史眼、史才には驚嘆に値するものがある。

最後に服部宇之吉氏は「目錄學概說」に於て、目錄の意義、目錄の起原、目錄の變遷、目錄の職分等につき叙述し、目錄學の必要を強調されてゐる。

要するに本書は立派な支那研究書であつて、支那研究者を利すること大なるものがあることは論を俟たない。(宮島貞亮)

## 國民黨と支那革命　共産黨との關係（安倍源基著　人格社發行）

民國十三年四月十二日發布せられた孫文の國民政府建國大綱に依れば、國民政府建設の基礎は、三民主義と五權憲法にありとし其の建設の順序を軍政訓政、及び憲政の三期となし、民國十七年（一九二八年）六月北支平定と共に軍事行動も一段落を告げて軍政時期を終り、茲に訓政時期を開始したるものとなしてゐる。然るにその實際建設事項に關する訓政宣言たるや、實に空なる宣傳に過ぎないものがあり、民族主義の主張に基く北伐運動には兎も角一應の成功を收め、其の他排英運動や、排日運動や、乃至は不平等條約の撤廢運動の如き對外關係に於ては相當の成功を收めたけれども、飜つて其の內政方面を見れば、政治の建設、經濟の建設教育の建設一として進步改善の跡の認めらるべきものがなく、徒に軍閥の打破とか、財政の統一とか、裁兵とか、又は淸廉なる政府の樹立とかと聲のみ大にして天下を欺瞞するものといふべきである。

兎に角現在の國民黨乃至國民政府なるものは、一部世間に誤傳される如き立派なる國民的理想や、革命的精神を有する政府でないのみならず、黨內政府部內の不統一新軍閥の對立抗爭は間もなく再び一大反蔣運動を起し、遂に武力對抗となり、內亂狀態に環元したのである。加ふるに共產黨各地に活動して暴動を起すあり、國民黨に依る支那の完全なる統一は多事多難といふべく前途尙遙遠なる觀がある。

今次の反蔣運動は、閻錫山を中心として、馮玉祥、改組派、及西山派等の大小軍閥合流參加し、北方政府樹立を標榜し、南北二大分裂の形勢となり、一面共產軍の暴動、放火、奪略、虐殺等恐怖的事件をさへ伴ふに至つた。かくして本年九月正式に北方政府の成立を見、南北兩政府の二大對立となつたのである。然るに北方政府部內の不統一は、其の後果して統制ある政府として活動するか否かに就て世人の疑問を喚起した所であり、飜つて南北兩軍の戰局は次第に南軍に有利に轉回し來り、十月に入り馮玉祥の太原

隱退となり、蔣氏の國民政府依然落ち着き、世人をして一先づ安堵せしめた觀がある。けれども、馮、閻の反蔣對立は今後も斷固として持續されるであらうから、何れにしても、新軍閥の擁する私兵を整理縮少して直接に中央政府統轄下に置き、新軍閥の對立抗爭の根源を一掃せざる限りは、何人が支那國民黨を組織し直すとも、支那の近世的國家の建設は多事多難といふべきであらう。明日を豫測し難き支那の事局、而も我日本にとつて最も關係の深い支那の將來が如何に展開せられ行くかは、彼の國の過去の正しき歷史研究の成果に立脚したる冷靜なる洞察眼を以つて始めてなし得べきものであると信ずる。いふまでもなく歷史研究の任務は單に過去の事實に關する知識の堆積に止まらず、それに依つて現代の實情を證明する事に努力すると同時に、併せて將來に對する觀測點を樹立して、無知なる人間を裨益せんと努むべきものである。

本書は實にかゝる現代支那を理解せんが爲に何人も知らざるべからざる支那現代の國民黨の創生より說き起して最近に至るまでの革命運動を叙述し、其の現狀を批判し、將來を論及せるものである。而して本書はこの國民黨の革命運動を正確に叙述し、支那の現實相を適確にする必要上先づ支那の共產黨の運動、殊に國民黨との關係について知る事を第一要件となし、特に此の點に關する資料の撰擇收集に留意してゐる。

著者は吾が內務省の委託により大正十五年から翌昭和二年まで革命の策源地なる廣東に滯在し親しく街頭に進出して、國民黨の革命運動と、共產黨の赤化運動とを目擊し、支那に於ける社會運動の實地討査に專心し、其の後北京に移り、昨年八月まで引きつゞき彼地で實地討査をつゞけられたそうである。本書に於ける著者の見解は昭和五年六月上旬迄の形勢を資料として觀察したるものであるが、卷末の結言には追記として其の後の支那時局の進展につきても附記して、國民黨の將來及び共產黨の將來につき大體の豫測をなし、讀者に向つて支那現代に對する一觀察點を提供された。實に本書は今日「支那を知らんとする者にとつては最も適切なる指針を與へられたものといふべきで大いにその努力を多とし、謹で感謝と敬意を表するものである。（昭和五年十月十一日稿山本光郎）

## 古代文學研究（倉野憲司著　岡村書店發行）

著者は曩に「古事記の新研究」を公にして僅に二年有餘今復本書を以て世に問はる。著者の撓まざる努力に對して先づ敬意を表するものである。

本書收むるところ總て八篇、今左にその簡單なる紹介を試みることゝする。

先づ「播磨風土記の研究」に於ては、（この論文は本書の中心となつてゐる）古風土記の成立を語り、當時勃興した歷史編纂の機運に乘じた結果であるとし、續日本紀、元明天皇和銅七年二月の條に「詔從六位上紀朝臣淸人。正八位下三宅臣藤麻呂。令撰國史。」とあるを引き、風土記の撰進が國史撰修と關聯した事柄であると喝破せられたのは卓見である。本項は更に神話を語り、說話を述べ